2024 年 3 月 30 日

研究休暇報告書

南山大学長
ロバート・キサラ殿

所　属　　総合政策学部　総合政策学科

職氏名　　教授　　山田　望

受入研究機関等：バチカン、アウグスティニアーヌム教父学研究所（*Institutum Patristicum Augustinianum*）
期間：2022 年 12 月 16 日～2023 年 9 月 14 日（273 日間：4 分の 3 年）
目的：　1．ペラギウス派に関する科研費研究課題のバチカン、アウグスティニアーヌム教父学研究所での研究
　　2.　ペラギウス派に関する文献研究成果と最新の考古学研究成果とを統合させる学際的研究

９か月間にわたる研究休暇期間中の研究活動について、下記の通りご報告申し上げます。

記

今回の研究休暇ではその全期間にわたって、バチカン市国、アウグスティニアーヌム教父学研究所に客員研究員として籍を置きながら、２つの科研費研究課題を遂行することを目的１として掲げました。既に取得していた２つの科研費のうちの１つは、私が研究代表者を務める科研費基盤研究 C「ペラギウス派神学思想の相互影響・発達史的観点による伝承史的・教会政治史的総合研究」という課題を格段に進展させるための研究です。この科研費研究を世界最高水準の図書館を有する当該研究所において遂行し、とりわけ Angelo Segneri 教授や Elena Zocca 教授をはじめとした、バチカンやローマ・サピエンツァ大学の気鋭の研究者との交流活動を踏まえた研究を行うことで、当該科研費基盤研究 C の研究を想定以上に進展させることができました。具体的には、ペラギウス派という古代キリスト教の分派は、その成立当初から「異端」としての特徴を備えていたというわけではなく、対立陣営との誤解やコミュニケーション不足、互いの言語解釈の齟齬などが要因となって、双方の主張がますます乖離・衝突をきたすようになっていった、との動的プロセスが一層明らかとなりまし

た。これにより、最終的に教会や国家の秩序を脅かしかねないと見做されたペラギウス派側が「異端」として排斥されるに至ったという、排斥までの相互影響・発達史的観点からの新たな方法論による、より精緻な実態解明を実現することができました。この研究成果は、2023 年 9 月 6 日～9 日にシンガポールにて開催された APECSS 初期キリスト教国際学会にて研究発表を行い、質疑応答でも高く評価され、今年 Brill 社から刊行される学術雑誌 *Scrinium* にも掲載が予定されています。

２つ目の科研費研究は、宮本久雄東大名誉教授を研究代表者とする科研費基盤研究 B による共同研究「東方・ギリシア教父と女性－その歴史的実態と東西キリスト教世界における解釈史－」の研究分担者としての研究です。私は、ペラギウス派がとりわけ東方ギリシア教父の女性観を継承していたとの観点から本共同研究に参画し、この研究も、同じくバチカン市国、アウグスティニアーヌム教父学研究所の文献史料を大いに活用し、研究所スタッフ、とりわけローマ・サピエンツァ大学から派遣されて客員教授として当該研究所でも教鞭を執っていた Elena Zocca 教授の古代女性論のセミナーにも積極的に参加することで、大いに研究を進展させることができました。この研究成果は、今年、教文館から刊行が予定されている『古代・中世キリスト教における女性イメージ』という単著に論文として掲載されることが決定しています。

研究目的 2 は、私の長年にわたるペラギウス派に関する文献学的研究成果を、ローマ市内の考古学発掘調査による最新の研究成果と統合、融合させることで、ペラギウス派のローマでの活動実態についてより実証的な学際的研究を行うというものでした。折しも、10 年ほど前から、ローマ市内ラテラーノ地区サン・ジョヴァンニ病院地下 7 メートルの地点において 4 世紀後半～5 世紀初頭のものと考えられるキリスト教救貧慈善施設の遺跡が発掘されており、これが管見では、時期的に見てもまたその地理的位置関係においても、当時ローマ市内に拠点を置いて活動していたペラギウス派による救貧慈善施設である可能性がきわめて濃厚だと判断しています。当該遺跡がペラギウス派による救貧慈善施設であるのか否か、について、研究休暇期間中に、実際に現場に足を運び、発掘作業に従事しながら壁画の図像解釈や碑文の解読作業に従事しました。その結果、このキリスト教救貧慈善施設がペラギウス派に繋がるキリスト者集団によるものであるとの推察がますます裏付けられ、ほぼそれは間違いないであろうとの判断が下せるまであと一歩というところまで、研究を進展させることができました。この研究成果については、今年の 8 月 5 日～9 日に英国オクスフォード大学で開催される国際キリスト教教父学会にて発表を行い、何としてもその学術雑誌である *Studia Patristica* への掲載を目指したいと考えています。

９か月間の研究休暇期間の全てをバチカン、アウグスティニアーヌム教父学研究所を拠点にして集中的に研究できたことにより、各研究課題を格段に進展させることができまし

た。これもひとえにこの研究休暇期間を与えて下さった南山大学のキサラ学長はじめ、総合政策学部総合政策学科の諸先生方からの一方ならぬご協力、ご支援の賜物に他ならないと心より感謝申し上げます。これからも、研究の成果を今後の研究・教育活動に積極的に活かしていきたいと考えております。

以上